

2月のコラム 記憶は、いつの間にか更新されなくなる

先月、パラオへダイビングに行ってきました。25年ぶり、4回目のパラオです。私の中に残っていたパラオのイメージは、どこまでも青く、美しく、太平洋の真ん中でしか味わえない巨大な魚の群れが、視界いっぱいに広がるとてもダイナミックな海。

ところが、今回、目の前に広がった海は、私の記憶の中にある風景とは、別の景色に映りました。確かに、魚の群れは大きいし、サメやナポレオンフィッシュの姿もあります。ただ、かつて感じたような、視界のすべてを埋め尽くす圧倒感や、息をのむほどの迫力は、そこにはありませんでした。色とりどりの小さな魚たちが舞っていたサンゴ礁も減り、どこか荒涼とした感さえありました。

現地ガイドのインストラクターは23歳。

「今日は特にコンディションが悪いの？」と聞いてみましたが、返ってきた答えは「いいえ、だいたいいつもこんな感じですよ」というものでした。考えてみれば、彼が生まれる前の話なのですから、変わっていても当然です。

このとき、海の変化を感じると同時に気になったのは、「きっと今も、あの光景が広がっているはずだ」と信じ、いつの間にか温暖化といった地球の変化さえ及ばない、聖域のように捉えていた自分自身でした。

記憶は、不思議なもので、色あせずに残ります。場合によっては、より美しい、より都合のよい方向へ。そして、その記憶を基準に、無意識のうちに「今」を見てしまう。気づかないまま前提にしているものほど、ずれたときの違和感は、大きくなるかもしれません。

職場や人との関わりについても、「以前はこうだった」「これで伝わるはずだ」という感覚を、知らず知らずのうちに基準にしてしまうことがあります。それは悪意でも怠慢でもなく、長く関わってきたからこそ、自然に身についてしまうものなのでしょう。

しかし、確実に時代も環境人も価値観も変わっているのです。自分の前提や見方を、今に合わせて更新できているだろうか。変化を感じ取ろうと意識できているだろうか？

25年ぶりのパラオの海は、そんなことを、静かに感じさせてくれました。

2026年2月 水田かほる